

『秋かぜの記』という標題について

安保 博史

《一》近世期紀行文の標題について

『奥の細道』という標題の由来については、夙に白石悌三氏の卓説「もう一つの『細道』—芭蕉と歌枕についての試論—」^{〔註三〕}が備わる。芭蕉が東下りの歌枕として伝統的な旅の本意を象徴するもう一つの「細道」である「蔦の細道」を意識し、「新しい旅の本意で仕立て直した」元禄の新東下りに「奥の細道」という標題を与えた経緯が広く知られるようになったが、今回、紀行文の標題の類型を考えるにあたって白石論を読み直すと、次のように有益な指摘がある。

芭蕉は宗因によって俳諧に開眼し、宗祇によって生涯を影響された。その宗祇に『白河紀行』があり、宗因に『松島一見記』がある。芭蕉がこれらの作品を知っていたとは明言しかねるが、まずは陸奥紀行に常識的な題号であろう。白河も松島も陸奥を代表する歌枕で、何よりも芭蕉自身が『おくのほそ道』の冒頭に「白河の関」「松島の月」への期待をまず記していた。にもかかわらず、芭蕉はなぜ世の常識にさからって、さほど有名でもない地名を選んだのか。まして、地名をうちつけに「おくのほそ道」という題号も変なものである。『白河』『松島』では題号の体をなさないように、これもまた『紀行』『一見記』を添えなければ体をなすまい。

白石氏は、普通は地名だけでは紀行文の標題とはなり得ず、「地名十紀行」、「地名十一見記」というように『紀行』『一見記』を添えなければ体をな

す「ことではない」とを示唆されたが、実際、中世末期から近世期の紀行文の標題の類型は、以下の通り、大略五つに分類することができよう^{〔註四〕}。

【類型I】「地名(人名・年号・俳句の一節)+紀行(記行)」

- | | | |
|----------------|-----------|---------------------------|
| 例1「熱海紀行」 | 例2「天橋立紀行」 | 例3「有馬温泉紀行」 |
| 例4「有馬記行」 | 例5「出雲紀行」 | 例6「伊勢紀行」 |
| 例7「伊良底紀行」 | 例8「卯辰紀行」 | 例9「梅之紀行」 |
| 例10「宇良富士の紀行」 | 例11「蝦夷紀行」 | 例12「蝦夷地紀行」 |
| 例13「江戸温泉紀行」 | 例14「鹿島紀行」 | 例15「金沢鎌倉紀行」 |
| 例16「寛政七年紀行」 | 例17「己巳紀行」 | 例18「高野紀行」 |
| 例19「西国紀行」 | 例20「宰府紀行」 | 例21「更科紀行」 |
| 例22「春秋庵白雄居士紀行」 | 例23「紹巴紀行」 | 例24「白河紀行」 |
| 例25「壬申紀行」 | 例26「壬戌紀行」 | 例27「角田川紀行」 |
| 例28「仙都紀行」 | 例29「宗長紀行」 | 例30「多田之紀行」 |
| 例31「筑紫紀行」 | 例32「津山紀行」 | 例33「丁丑紀行」 |
| 例34「東国紀行」 | 例35「東海紀行」 | 例36「日光山紀行」 |
| 例37「野ざらし紀行」 | 例38「麦水紀行」 | 例39「白山紀行」 |
| 例40「函館紀行」 | 例41「白馬紀行」 | 例42「はすの葉の紀行」 |
| 例43「八丈記行」 | 例44「丙辰紀行」 | 例45「豊国紀行」 ^{〔註五〕} |
| 例46「木因翁紀行」 | 例47「身延紀行」 | 例48「大和紀行」 |

例 49「湯山紀行」

例 50「よし野紀行」

【類型Ⅱ】「地名十記(紀)」

例 1「東路記」あづまじのき

例 2「江の嶋の記」

例 3「奥羽行紀」

例 10「紹巴富士見道記」

例 11「紹巴道の記」

例 12「宗長道之記」

例 4「熊野路記」

例 5「熊野まうでの記」

例 6「高野山参詣記」

例 13「但馬湯嶋道之記」

例 14「筑紫道之記」

例 15「肥後道之記」

例 7「高野詣記」

例 8「十仏参詣記」

例 9「西遊雜記」

例 16「富士の道の記」

例 17「松しま道の記」

例 18「幽斎道之記」

例 10「太神宮参詣記」

例 11「椿まうでの記」

例 12「東西雜記」

例 13「東西遊記」

例 14「都のぼり道の記」

例 15「吉野詣記」

【類型Ⅲ】「地名(年・季節・月・人名)十日記」

例 1「梅桜日記」

例 2「奥羽日記」

例 3「岡部日記」

例 4「奥の小日記」

例 5「温泉旅行日記」

例 6「寛政三年帰郷日記」

例 7「衣更着日記」

例 8「紀州行日記」

例 9「岐曾路日記」

例 10「玄与日記」

例 11「甲申旅日記」

例 12「西花上洛之日記」

例 13「西国道日記」

例 14「佐渡日記」

例 15「上京日記」

例 16「菅笠日記」

例 17「住吉紀行」

例 18「西北紀行」

例 19「善光寺紀行」

例 20「宗長駿河日記」

例 21「名古屋行日記」

例 22「花見の日記」

例 23「富士日記」

例 24「みち奥日記」

例 25「若山行日記」

【類型Ⅳ】「地名十一見(覽)記」

例 1「東下り富士一見記」

例 2「富士一覽記」

例 3「松島一見記」

【類型Ⅴ】「地名(人名)十道(路)之記」

例 1「伊香保道之記」

例 2「関東下向道記」

例 3「木曾路之記」

例 4「九州道の記」

例 5「熊野路記」

例 6「玄旨法印道記」

例 7「庚子道の記」

例 8「四国道之記」

例 9「照顔齋道の記」

中世末から近世期の紀行文の標題は、右の【類型Ⅰ】～【類型Ⅴ】を一覧しても明らかな通り、旅行先の地名や旅行者の人名、旅行時の年号・季節などに、「紀行」・「記(紀)」・「日記」・「一見(覽)記」・「道(路)之記」などを添えて命名されることが一般的である。

例えば、芭蕉の貞享元年(一六八四)八月から翌年の四月末までの九か月の俳諧紀行を、現在、『野ざらし紀行』と称することが多い。しかし、この紀行文は初めは芭蕉自身の命名がなく、草稿のまま伝来したため、旅立ちの句の上五の「野ざらし」や「芭蕉」という名に「集」・「紀行」(【類型Ⅰ】)・「道之記」(【類型Ⅴ】)を添えた、「のざらしの集」「野ざらし乃紀行」「野ざらしの紀行」「野晒紀行」「野曝紀行」「芭蕉翁道乃記」「芭蕉翁野佐らし紀行」といった標題や、旅をした年を示す「甲子」に「紀(記)行」(【類型Ⅰ】)「吟行」を添えた、「芭蕉翁甲子の記行」「芭蕉翁甲子吟行」「甲子吟行」「甲子紀行」といった標題を派生するようになったのである。¹⁶⁾

このように、紀行文の作者以外の人々が、地名や人名などに紀行用の常套語を加えて標題としていた事実からは、当時の紀行文の命名のあり方の類型性が窺えて興味深い。つまり、紀行文の標題は、命名が作者であるか否かに拘わらず類型的・常套的にならざるを得ないのであり、その結果、横井也有『熱海紀行』延享二年(一七四五)・中山高陽『熱海紀行』安永五年(一七七六)・藤原祐邦『熱海紀行』安永八年(一七七九)・平田湖真『熱海紀行』文政四年(一八一八)など四つの『熱海紀行』、涌蓮『吉野紀行』宝暦二年(一七六

二二・几董『吉野紀行』(寛政二年(一七九〇)・定雅『吉野紀行』(文化九年(一八一〇)・司馬江漢『吉野紀行』(文化九年(一八一二)など四つの『吉野紀行』が象徴するように、同名の標題が何度もつけられていくのである。

その意味で、旅の俳諧諸九尼が、明和八年(一七七二)の陸奥行脚後直ちに俳諧紀行と俳諧撰集を上下二巻に編み、翌九年、旅の象徴的用具である「笠を通して自らの人生を顧みた道中吟「いつしかとほつれし笠やあきの風」の下五に「記」を添えて『秋かぜの記』と命名して刊行した事実は、作者独自の命名意識が顕著な例として注目されるのではないか。

今回は、『秋かぜの記』という標題の由来となった句を軸に諸九尼の人生と文学について考察し、以て近世期紀行文では稀有な「標題そのものの自照性」を明らかにしてみたい。

《二》旅の俳諧諸九尼について

女流俳諧師として有名な「諸九尼」は、通称を「なみ」といい、正徳四年(一七一四)、筑後国竹野郡唐島村(現福岡県浮羽郡田主丸町)の庄屋(永松十五郎)の四女として生まれ、長じて近村中原村の同族の庄屋永松万右衛門に嫁した。転機は、三十歳頃に訪れる。筑後川畔の川の瀬に滞在し、俳諧(俳句)指導に当たっていた野坡門の俳諧師有井湖白(のちの浮風。元直方藩士有井義保、当時四十二歳)と駆落ちして上阪した。

上方では、夫浮風の指導のもと、俳才を育み、延享三年(一七四六)、三十三歳の年、杏雨編『松の中』に「波女」号をもつて一句入集したのを手始めに、諸俳書に彼女の繊細鋭敏な佳句が見えるようになる。宝暦五年(一七五五)冬、

京都に移住し、五条に千鳥庵を営み、号も雌鳩(のち諸九に改号)と改めた。夫婦相和した精力的な俳壇活動が実り、宝暦十二年(一七六二)四月、夫浮風は、芭蕉・野坡二翁の石碑の建立・開眼供養を挙行し、その記念集を刊行するなど年来の念願を成就した。が、その矢先、浮風は、五月十七日、「つれもありいまはの空のほととぎす」を辞世の句として急逝する。同年、四十九歳の諸九は、浮風百ヶ日の忌日に剃髪して尼となり、京の岡崎に草庵を求め、浮風居士の画像をかけて、亡夫を偲ぶ日々を送った。

その後、諸九尼は、『秋風の記』の旅など各地に杖を曳き、雅交を重ねる日々を過ごしたが、安永七年(一七七八)、六十五歳の年、亡夫十七回忌を節目として京を去り、亡夫の郷里筑前直方山部に庵を結び、晩年の日々を送った。天明元年(一七八一)九月十日没。享年六十八歳。法名は天利院高誉諸九蘇天である。

ところで、諸九の前号「雌鳩」は、『詩経』周南・関雉の「関雉鳩ハ河ノ洲ニ在リ 窈窕タル淑女ハ君ノ好逑」による。雌鳩は「鶉」の異名であり、古来、雌雄の情愛のこまやかな鳥とされるとともに、淑徳ある女性のたとえにも用いられたものである。出会いの事情はどうあれ、この俳号そのままに、諸九は浮風の良き妻として穏やかで愛情溢れた家庭生活を送った。

例えば、「あるじの行脚の留守を守りて」と詞書した「待日数うれしや暮れて郭公」という句や、浮風追悼句「暮むつはその暁やほととぎす」の詞書の「塵を出てちりにまじはり、市にかくれて市に遊ぶを、我夫の生涯として、起臥をたすけあひ、幾年月をかさね、あるは三つき五月の行脚の留守だに、よすがのおぼつかなきをかこち過しけるに(後略)」(『その行脚』)という記述などは、西国行脚の夫の帰りを指折り数えて待つ、彼女の幸福な姿を彷彿とさせる。郷里を捨て、上方に旅立ち、難波・京で「起臥をたすけあひ、幾年月をかさね」た二十

年間の日々は、夫浮風の死によつて儚く消えた。諸九は「長きわかれのかなしさは、我身ひとつのやうに覚へ」^①『その行脚』、異郷の地に残された悲嘆を晴らすべくもなく、ひたすら浮風の冥福を祈るしかなかった。諸九は、浮風百ヶ日の忌日に剃髪し、「蘇天」と称し、次の句を詠むのである。

百ヶ日もとどりをはらひて

掃捨て見れば芥や秋の霜 諸九尼 蘇天

右の「芥や」という決然たる言葉からは、黒髪が象徴する、これまでの女としての妻としての境涯を「芥」と切り捨て、ひとり尼として生きようとする諦念とも、決意とも思える響きが伝わる。その決意とは、亡夫とともに励んだ俳諧の一筋に生きることであった。旅の俳尼諸九の誕生である。

諸九は諸九尼として蘇る。同年秋には浮風の画像を笈に忍ばせ西国行脚に出立、各地の浮風ゆかりの知人や門人と交流しつつ「追善の句を拾ひ」^②『その行脚』杏雨序集め、翌年帰京、浮風一周忌追善集として『その行脚』上下二巻を刊行したのを皮切りに、亡夫の志を継いで西国行脚を重ねる一方、明和八年（一七七二）には全行程五百五十里の松島行脚を敢行し、俳諧紀行『秋かぜの記』を成している。このように、諸九尼は、旅の新天地の中での実体験を通して、「涙ぐみて馬もゆくなり枯野原」家に帰る人うらやまし鳴の声」草に寝て睨うれし雉子の声」など旅の哀歎を率直に表現した句、「枯るるほど草にしみこむ冬の月」「行く春や海を見て居る鴉の子」など精細な自然観照の句を残すことになった^③。

《三》『秋かぜの記』—その表現

明和八年（一七七二）三月末、五十八歳の諸九尼は、只言法師を伴つて洛東岡崎を出発する。石山寺に詣でて、翌四月一日、一路東海道を下り、五月は二十日間あまり江戸に滞在し、鹿島を経て、六月中旬、仙台に到着した夜に病を得たが、回復後、松島・壺の碑・宮城野などに遊ぶ。八月五日、帰途につき、白河の関・日光・桐生・善光寺を巡り、諏訪湖を通つて美濃路に出、九月四日、石山寺に帰着した。諸九尼は、この前後四ヶ月に及ぶ奥羽行脚の体験を紀行文にまとめ、道中で得た諸国の俳諧好士の吟三百余句をも収めて、明和九年（一七七二）、上巻（俳諧紀行）・下巻（俳諧撰集）二巻を上梓した。

上巻『秋かぜの記』の冒頭は次のように書き出されている^④。

奥のほそ道といふ文を読み初めしより、何とおもわく心はなけれど、ただその跡のなつかしくて、年年の春ごとに、霞と共にとは思へど、年老いし尼の身なれば、遙かなる道のほども覚束なく、（中略）この年月をいたづらに過しけるに、ことしの春はさる道祖神の憐れみ給ふにや、はからずも只言ほうしに誘はれ参らせて、逢坂の関のあたりにこえ行く事とはなりぬ。都の空はいふも更なり、住みなれし草の戸も、又いつかはと思ふ名残の露を置きそふこちす。

山ぶきや名こりは口にはねども

右の文には、能因・西行・芭蕉という陸奥ゆかりの古人の詩句を織り交ぜつつ、「日々旅にして旅を栖とす」る人生の実践者として敬慕する芭蕉が歩んだ「ただその跡」を自ら辿りたいという旅立ちの動機と抱負、「又いつかはと思ふ名残」は尽きないけれども、それを振り切つて「住みなれし草の戸」を踏み出していく旅への決意が記されている。

『秋かぜの記』は、諸家の指摘する通り、芭蕉の人と作品とを強く意識した作品である。特に『奥の細道』の影響が色濃く見られ、一見、文学的独自性に乏しいように見える。しかし、他の女流文学者が、平安期の『土佐日記』や『更

級日記』鎌倉期の『十六夜日記』などが導き出した「旅」のイメージをなぞって旅をし、自らを既知の物語や紀行文の主人公に擬して紀行文を記すレベル^{【まも】}にとどまっているのに対し、諸九尼は、旅の現実を雅俗の別なく活写し、作者の真情を率直に表現し得ている。この点において、『秋かぜの記』は高い文学史的地位が与えられているのである。例えば、

十八日、空晴れぬ。さやの中山は、けはしき峠もなけれど、行きちがふ馬も人も、山陰にみえかくれてさびし。閑呼鳥の声、ほのかにきこえ、行き行くもねぶたき心ちしけり。菊川もほど過ぎて、大井川にいたりぬ。此程の雨に水高く、きのふまで渡しもとまりけるが、けふなん川の口あきぬるよし、聞くもうれしく、いざわたしてといへば、おかく作りたる台にかきのせ、人あまたしてかつぎ行く。肩の上に波打ちこして、あやうくおそろしく、いきたる心地もせで、目ふさぎ念仏申すうちに、わたりはてぬ。夢のさめたらんやうにみかへれば、跡は遙か^{【は】}に、わたり来る人の、ちいさき水鳥の波にただよひたらんやうに見るさへ、いみじくめぐらしく詠^{【うた】}められて、

涼しさのあつさにかはる淵瀬かな

という記述が、歌枕(和歌の名所)である「さやの中山」の現実の自然の情景を立体的に表現し、大井川の淵瀬を蓮台で渡る折の「目ふさぎ念仏申すうち」の不安と恐怖、渡り終えた後に「わたり来る人の、ちいさき水鳥の波にただよひたらんやうに見」えた心の弾みをありのままに示した上で、「涼しさのあつさにかはる淵瀬かな」と、実感を平明なことばの中に吟じ込め、

爰より舟に乗りて、宵の程に四里ばかり漕ぎ出すに、風あしきとてかえりぬ。かくて爐^{【かまど】}の方に、うし車引き出せるやうに、ころころと枕にひびきて、まじろみもやらす、短夜ながら千歳ふる心地す。やや暁はなれけるままに、さし覗きてみれば、車にはあらず、船頭の舳なりけり。傍の人のゆり起して、はやく舟を出せよといへば、あなかしがまし、舟は風にこそまかせつれと、あくびうちして足を踏みのばし、手を上へさし上

げたる様は、舟よりも此男の丈ぞいと長かりけり。

という記述が、利根川下りの舟に乗った折、「うし車引出せるやうに」鳴り響く音のために眠れなかつたが、その音が「車」ではなく「船頭の舳」であったと驚き、その船頭の野卑な様子を嫌悪するでもなく、「舟よりも此男の丈ぞいと長かりけり」と面白げに描写する表現傾向を示している点などは注目されてよい。

このように、時には、思い切つて、土地の現実に触れた感興を奔放自在に表現する創作姿勢は、「一つの定められた枠の中で、それにふさわしい題材を選び、予定された感動にひたり、細部の描写に心を砕く」^{【まも】}ことを基本的姿勢とする他の女性紀行とは異なる独自性を有していると言える。倉敷の俳人暮雨^{【ぼりう】}が、彼女を『十六夜日記』の作者阿仏尼や『更級日記』の作者菅原孝標女と並ぶ「女中ノ豪傑」『秋かぜの記』暮雨序と絶賛する所以である。

《四》『秋かぜの記』―日数ふる旅―

八月五日、仙台を出立し帰途についた諸九尼は、十二日には白河の関に着いた。彼女は、この和歌の名所での感懐を次のように記している。

覚束なき日数つもりて、十二日には白河の関に出でぬ。山も野もをしなべて色づきわたる、木ずゑの川づらにうつりて、からくれなゐに染めなせる気色、都にはまだ青葉にてみしかども紅葉ちりしくと詠じたるも、そぞろに心にこたへ、

いとなくほつれし笠やあきの風

ところで、陸奥国の玄関口である白河の関は、里村昌琢編『類字名所和歌集』元和三年刊第六「白川関」に掲げられた歌のように、

拾遺秋 便あらばかて都へつげやらむけふ白川の関はこえぬと 平兼盛

(中略)

後拾遺旅 都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹くしら川の関 能因法師

千載夏 みで過ぐる人しなれば卯花の咲ける塙かきねやしら川の関 藤原季通朝臣

同秋下 紅葉ばのみな紅にちりしけば名のみなりけり白川の関 左大弁親宗

同 都にはまた青葉にてみしかども紅葉ちりしく白川の関 従三位頼政

続後拾遺冬 わかれにし宮このあきの日数さへつもれば雪の白川の関 大江貞重

同物名 都出て日数思はば道とをみころもへける白川の関 津守国助

(下略)

などと詠まれてきた。右の歌に共通するものは、宇城由文氏が説く通り^{〔五九六〕}

「遠く離れた都への郷愁であり、ここに到るまでに要した日数の長さ」である。

歌枕としての本意は「まるで地の果てに來た如き不安と、それ故に生じる都への限りなき郷愁」にあり、イメージは、俳諧の世界でもそのまま踏襲されて行く。実際、松江重頼編『佐夜中山集』(寛文四年刊)巻六一「名所之付合 廿一代

集歌 詞書等」に、

「白河の関」…月 秋風 旅 別 都恋 雪 時雨 紅葉 卯花 みちのく 東路

塩竈浦

高瀬梅盛編『俳諧類船集』(延宝四年刊)に、

「白川の関」…秋風ぞふく 唐錦 多ぞが千嶋 塩竈の浦 卯花 東路 日数ふる

旅 霞 泪 みちのく 紅葉 花

とある通り、歌枕そのままの付合語が、これらには登録されているのである。

『おくのほそ道』の白河の条が右の歌枕本意に忠実に書かれていることは、乾裕幸氏が、

心許なき日かず重るままに(類船「日数ふる旅」、白川の関にかかりて旅心定めぬ。いかで都へと便り求めしも断り也(佐夜「都恋」)。中にも此の関は三関の一にして、風騒の人心をとどむ。秋風を耳に残し(佐夜「秋風」類船「秋風ぞふく」、紅葉を佛にして(佐夜「類船」紅葉)、青葉の梢猶あはれ也。卯の花の白妙(佐夜「類船」卯の花)に、茨の花の咲そひて、雪にもゆる心地ぞする(佐夜「雪」)。古人冠を正し衣装を改めし事など、清輔の筆にもとどめ置かれしとぞ。

卯の花をかざしに関の晴着かな 會良

と具体的に照らし合わせて指摘する通り^{〔五九七〕}、この段における芭蕉自身による判断は、「旅心定めぬ」と「青葉の梢猶あはれ也」の二つに過ぎない。実景は「茨の花」のみなのである。とりわけ、芭蕉は、能因の「秋風ぞ吹く」の歌に深く執し、

能因法師が「秋風ぞ吹く」の歌を不慮に案じだして、この歌はその所にさし向かはずは詠みがたき事と思ひて、かの歌披露せんために、浴中の好土達いとまをひて、(中略)半年ばかりわざと家に棧敷をかまへ、軒を日の光の入る程こぼちのけて、顔を日にあぶり黒めて後、さしいで、修行より帰り侍りぬとて、この歌を出しけるとなん。

『愚秘抄』

と伝承化された数寄者能因の故事^{〔五九八〕}に則して、白河の地で「早苗にも我色黒き日数哉」(『俳諧書留』)と詠む^{〔五九九〕}ほどであり、結局、『おくのほそ道』には採用しなかつたにしろ、「日数」の語だけは、「心許なき日かず」と残すほどののである。このように、白河の関は、いわば、歌俳共通して「月日をこえて行よしを説」(『歌枕秋の寝覚』)む僻陬の聖地として伝承され、陸奥に君臨してきたのである。

上述した白河の関の文学的伝統とその存在像に照らせば、諸九尼の白河の関の描き方もやはりこの歌枕の本意を踏襲していることは明白である。つま

り、『おくのほそ道』に「心許なき日かず重るままに、白川の関にかかりて旅心
定りぬ」とあるのを踏まえて、「覚束なき日数つもりて、十二日には白川の関に
出でぬ」と書き、眼前の「山も野もをしなべて色づきわたる」紅葉の風景に、「都
にはまだ青葉にてみしかども紅葉ちりしく」(『千載集』巻五秋歌下・源三位頼
政)白河の関の、都からの長い日数の経過を詠嘆する詩情を重ねた上で、「いつ
となくほつれし笠やあきの風」と詠み、長途の旅の間にいつのまにか端がほつれ
てしまった「笠」を通して、「日数ふる旅」のイメージを具象化しているのである。
常套的な顔の色ではなく、「麻のさ衣もしほれはてたる様」(『連歌至宝抄』)でも
なく、旅の象徴たる「笠」のほつれに「日数ふる旅」の本意を滲ませる手法は見
事な手際と言える。

《四》『秋かぜの記』という標題

それにしても、「そぞろに心にこたへ」はどのように理解すべきなのか。

眼前の紅葉の景を通して、先の源三位頼政の「都にはまだ青葉にてみしかど
も」の歌を世界を実感し得た喜びを表現し得た喜びを表現したにしては些か
大袈裟であろう。また、「あきの風」と「笠」との関わりも今ひとつ明確ではな
い。ということとは、右の二点を明確にしない限り、「いつとなくほつれし笠やあ
きの風」の句も十分に理解し得ないことになる。以下、これらの点について考察
すること本稿の結びとしたいと思います。

まず、「いつとなくほつれし笠」が、「日数ふる旅」(長旅)の象徴であることは先
に述べた通りであるが、「こ」では「いつとなく」に注意してみよう。

「いつとなく」と「いつ」とは、「いつのまにか」の意だが、これは、源三位頼政

の「都には」の歌と同じく、都を青葉の頃に出発し、文字通り「紅葉ちりしく」
頃まで続けてきた長い旅の間中、日頃顧みることがなかった「笠」に、思わず「ほ
つれし」部分があることに気づいた軽い心の動揺を示しているであろう。ある
いは、「笠」の「いつのまにか」ほつれた端が秋風に微かに震えているのを見て、「目
にはさやかに見え」(『古今集』秋上・藤原敏行)ぬ悲秋の到来を、虚を衝かれた
ように痛感して、季節が二度と回帰することがないままに、いつ知らず推移し
ていることへの作者の驚きをも二重に言いこめた表現とも考えられる。

いずれにしても、「いつとなく」は、自らの日々の営みとは関わりなく、時が、
季節が無情にも経過し、回帰することがないことを示していると考えられよ
う。とすれば、源三位頼政の「都には」の歌に「そぞろに心にこたへ」というの
も、「いつとなくほつれし笠」と同じく、時、季節の推移とともに、人生も「いつ
となく」しかし確実に移り変わり、老いを迎えることを身に沁みて感受したこ
とを言い表したものであると分かってくるのである。

かく考えると、「いつとなくほつれし笠やあきの風」の句は、明和八年(一七
七一)、五十八歳の「覚束なき老の身」(『秋風の記』仙台の条)である俳尼の人生
の秋の悲しみを繊細に表現した自照句の秀吟であることが理解できるのではな
いか。

諸九尼は、この句の下五「あきの風」に「記」の語を添えて『秋かぜの記』という
標題を作った。まさに、この名には、四季の巡りとともに人生の流転と行脚を
繰り返してきた諸九尼の人生の軌跡が言い込められているのである。本紀行の
序文を記した倉敷の暮雨のことばに倣えば、自照性豊かな命名意識という点
でも、『秋かぜの記』は、菅原孝標女が老いた我が身を更級の姨捨山の媼に擬し
て日記の標題とした『更級日記』と並ぶ作品であったと言える。

《五》今後の課題

近世期の紀行文の標題は類型的常套的に命名され、標題も付されずに草稿のまま書き捨てられた作品も多く、『奥の細道』や『秋かぜの記』のように作者独自の明確な命名意識が窺えるものは少数であった。今後は、こうした標題の命名意識に潜む「紀行文」を記す人々の創作姿勢や、当時の「紀行文」の文芸的価値の問題などを考察したい。

※※注※※

〔注一〕白石憐三氏「もう一つの『細道』」芭蕉と歌枕についての試論——『文学』昭和五〇年一二月号

〔注二〕分類の際には、板坂耀子氏の諸業績を参照した。特に、『江戸の旅と文学』へりかん社 平成五年刊の学恩には感謝したい。

〔注三〕『俳文学大辞典』角川書店 平成七年刊六六〇頁「野ざらし紀行」(弥吉菅一氏担当)参照。

〔注四〕大内初夫氏・飯野松子氏・阿部王樹氏編『湖白庵諸九尼全集 増訂版』和泉書院 昭和六一年刊所収「湖白庵諸九尼の生涯」(大内初夫氏)では、「宝曆六年『窓の春』編集の際、雌鳩号に改めたとも考えられる」(四二五―四二六頁)とある。

〔注五〕大内初夫氏は、『俳林逍遙』勉誠社 昭和五九年刊所収「旅の俳諧師諸九尼——その生涯と俳句——」の中で、諸九尼の人生を三期に分け、浮風と共に暮らした二期十九年の上方時代の句の中から佳句を掲げ、これらの作品に「繊細鋭敏な感性や小さな生物に対する愛憐の情」が窺われるとした。

〔注六〕本文は、注四の全集本に拠ったが、適宜濁点を付した。以下、同じ。

〔注七〕板坂耀子氏『江戸の旅と文学』へりかん社・平成五年刊所収「女性と旅」二六二頁に指摘がある。

〔注八〕注七上掲書「女性と旅」二六五頁に指摘がある。

〔注九〕宇城由文氏「風流の初」『奥の細道』試論——森川昭氏編『俳諧史の新しき地平』勉誠社 平成四年刊所収二〇一―二〇二頁に指摘がある。

〔注十〕乾裕幸氏「おくのほそ道」歌枕の想像力——『国文学』第三四卷第六号(平成元年五月)四九頁―五〇頁に指摘がある。

〔注十一〕『袋草紙』十訓抄『古今著聞集』愚秘抄などは、能因の数寄者ぶりを示す例として陸奥行脚を虚構とする話を載せる。

〔注十二〕後日「西か東か先早苗にも秋の風」と改作しているが、この句も『奥の細道』には採用していない。